



問題解決力

武井 恵雄

(帝京大学理工学部情報科学科)

takei@ics.teikyo-u.ac.jp

●

社会の流動化に伴って、現実問題の解決につながる力を持つことが、ますます期待される時代になってきた。高度な情報システムの構築は、まさにこの好例であろう。情報システム企業での人材育成では、従来のサービス型事業と分けて、問題解決指向とか、ソリューション型と呼ぶ事業を意識した新入社員教育を行っている。情報システムの仕様の提案や決定には、踏まえるべき技術力もさることながら、顧客の意向やマーケットの動向を見切る力が重要となり、確かな問題解決力が求められているからだろう。

●

社会に出てから問われる問題解決力は、問題に合わせてその都度調整しなければならないし、必要ならあらためて学習して、獲得しなければならない。しかも欠けている力は、問題に出会って初めて気づくものだし、そのような機会がこれからはますます増えるだろうから、あらかじめ勉強して備えておくというわけにはいかない。その意味で今は、本格的な生涯学習の時代に入ってきたといえるだろう。

だが、“学習は生涯続く”ということは、昔風の“毎日が勉強”という隠棲者の生活とは趣がだいぶ違う。こうなると「大学は、生涯学習の基盤として機能しているか？」という問いが、現実の重みを持って立ち上がってくる。以前だと、“大学は研究をするところですし、学生は努力する研究者の背中を見て育っていますから、産業界の役に立つはずですよ。どうぞよろしく”というベストエフォート型だったが、そうはいかない。何が将来、役に立つ力となるのだろうか？

こういった議論が始まると、大抵は学齢期のうちにできるだけ力を蓄えておくべきだということになり、次に

は何が基礎学力になるかという議論になる。国語力だ、読書力だ、論理的思考力だといったところに話が進み、挙句の果てに、やっぱり英数国だと言出す人がいて、大学はどこに行ってしまったんだという笑い話になるが、企業の人事担当者の中には、“地頭(じあたま)”が大事なので、英数国でよいのだという人もいて、大学の人間はがっかりして議論を止めることになる。

だが、これからの時代にどうなるかは別として、その人事担当者が読み取っていた指標は、それが優れていれば入社後の活躍にもつながったはずのものである。そういう指標はいろいろあろうが、質問や討論で見せる応募者の問題解決力ではないだろうか。社会に出る前のことだから、上で議論したものと同質ではないが、自分で学習して自分で考えられる力、つまり自己学習力であろう。

●

問題解決力を持つということは、その問題に対面した時にどう考えるかということから始まる。対象を自分の中に取り込み、既知の知識の枠組みで整理できるかどうかまず確かめる。知識とは、その人の理解の整理の結果であり、理解とはその人が持つ基本的なカテゴリーのレベルで行われる組織化だから、過去に解決したものが流用できないなら、自分が保有するカテゴリーの枠を動かすしかない。この心的操作が思考だとされるが、この操作は、ある部分はヒトの基本機能であり、ある部分は学習によって獲得される機能であり、教育はそこに寄与できると考えられる。

基本的なカテゴリーというのは、木や草や花、鳥、虫といった生き物では、ヒトが自然に認知し得る属のレベルがそれに当たるといふ。モミジやサクラ、カモやクワガタのレベルであり、本来は、イロハカエデとハウチワカエデのような種のレベルではないそうだが、記号化が進んだ社会では、小さな子どもがノコギリクワガタとミヤマクワガタを識別し、学生は楕円的と双曲的を識別し、研究者は、今では不規則振動とカオスの挙動を識別する。基本カテゴリーの枠組み自体が推移し、拡大されているのである。

自己学習力は、以前では大学受験のときに試されたが、記号化、つまり情報化が進んだ今の社会では、高校だけでなく大学初年級までをその獲得期と考える必要が出てきた。なぜなら、高校の情報教育では、身体性の強い情報行為・情報技術は身につくが、情報技術そのものや社会との関連は大学で学ぶことだからである。しかし、昔とは圧倒的に違う人数の若者が、情報教育で力をつけて社会に出て行く時代がきたのである。

(平成 15 年 10 月 5 日受付)

